



高橋睦郎氏

ころでは、晩年、二人の関係は冷えていたようです。これは無理もないことで、妻にばかりスポットライトが当たるんですから、どんどん夫は内向していく。しかし晶子は原稿を量産しなければならぬから、にこにこしてばかりもいられません。晩年、一緒に撮った写真を見ると、二人とも気難しい顔をしていますね。晶子が、自伝的な小説「明るみへ」の中で、寛がかなり鬱屈していて、嫌な男であるように書いています。しかし晶子は精神的に健康であった人のようですね。お金に困って愚痴を言ったりもするけれど、そんなに深刻じゃない。それで支援する人も出てきたり、出版社がお金

の前借りをさせてくれたりします。基本的にはたくましいんですよ。苦境を苦境とも思わないところがあって、向上心をいつも持っていて、成長していくんですね。それで夫も成長させたい、子どもには教育を受けさせたいという気持ちを持っていました。寛は「与謝野寛短歌全集」の序文で、手放しの妻褒めをしています。寛の没後、晶子も寛をたたえる歌を作っています。例えば、

取り出でて

死なぬ文字をば読む朝は
なほ永久の恋とおぼゆる

寛の書いたもの、つまり文学で

すね、これを読むと今でも永久の恋だと思える。

世の中は寛よりも晶子を評価しました。しかし晶子の意識としては、自分はいくまでも夫の代理だ。そういう意味でも晶子は本来の天照だと思えます。詩歌の大巫女であることによつて、女神として私たちの前に輝いている。しかし寛は、彼女が本当の女神で、自分は男巫女であるというように美しい事を言っています。

彼女の歌を一つ選ぶとすると、

劫初より作りいとなむ殿堂に
われも黄金の釘一つ打つ

世の始まりから、人間が、あるいは人間を超えた存在が作りいとなんできた詩歌の殿堂に、私も及ばずながら黄金の釘を一つ打つんだ。それが私の人生であり仕事なんだという事を言っています。謙虚であると同時に誇りに満ちた歌ですね。彼女の一生をよく代表している歌ではないでしょうか。

北九州芸術劇場小劇場
参加者約一八〇人

文学講座
4月26日(土)～5月31日(土)

本展第三部監修の近藤晋平氏ほか、研究者による連続講座を行いました。様々な視点から、与謝野寛・晶子の魅力についてお話しいただきました。

◎國生雅子氏 (福岡大学教授)

「文学と美術―総合芸術雑誌としての『明星』」

◎井上洋子氏 (福岡国際大学教授)

「『明星』から『スバル』へ―晶子、評論活動への転換―」

◎島田裕子氏 (歌人・梅光学院大学教授)

「鉄幹への愛―与謝野晶子と山川登美子の恋の歌について―」

◎阿部誠文氏 (歌人・俳人・九州女子大学教授)

「『白桜集』―晶子の鉄幹への愛の歌―」

◎近藤晋平氏 (近代文学研究者)

「九州と与謝野寛・晶子―若松・中津・人吉を中心に―」

受講者各回約三十五人



近藤晋平氏

来館者の声

◇与謝野寛・晶子の直筆を見ることができ感動しました。(六十代女性)

◇晶子の短歌の素晴らしさに圧倒されました。(六十代女性)

◇書簡や本だけではなく、その人となりに関わるものまで近くで見学でき素晴らしい。細部まで郷土と関連づけて教えていただき嬉しく思います。(四十代女性)

◇若松に来訪していることを初めて知りました。(六十代男性)

◇晶子訳の源氏物語を愛読しています。今回は書や書簡など普段見ることのできないものに触れ非常に感銘を受けました。(六十代女性)

このほか、たくさんのご感想をいただきました。ありがとうございます。